

巻頭言

“リスク”を見つめる社会へ
—安全・安心をつなぐ対話—

横浜国立大学 総合学術高等研究院
客員教授
田邊 雅幸



私たちが「安全」と感じるとき、その裏には必ず、何らかのリスクを減らす努力や備えがあります。リスクそのものをなくす取り組みもあれば、発生しても被害が最小になるよう対策を講じる工夫もあります。そうした“安全”が目に見えるかたちで伝わり、人々が納得したとき、初めて“安心”が得られます。安全と安心は別のもの。その橋渡しとなるのが「リスクを考える力」です。

このような考え方が日本で注目されるようになったきっかけの一つが、2011年の東日本大震災でした。想定をはるかに超える自然災害と事故を経験したことで、私たちは“絶対に安全”という思い込みから抜け出し、「リスクを前提に安全を築く」視点の必要性を強く認識するようになりました。危険物を扱う現場では、法令が示す基準を満たすことが出発点ですが、設備の高経年化、自然災害の激甚化、新燃料・新素材の普及などにより、現場ごとのリスクは多様化しています。基準に従っていても不安が残るとき、何が心配なのかを「リスク」として言語化し、優先順位を付けて対策し、その根拠を説明できることが、規制の実効性と社会の信頼を支えると考えます。本誌が、産官学の知恵を持ち寄り、経験と学びを共有する場として、リスクベース化の議論を後押ししていくことを期待しています。

私は現在、横浜国立大学で、企業・行政・大学が協力しながらリスクに基づく安全マネジメントの教育と研究に取り組んでいます。この活動は「ストラトジックPSM研究会 (SPSM)」という枠組みで進めており、現場の技術者だけでなく、制度設計を担う行政や安全文化を育む大学・研究機関と共に、リスクに向き合う“共通の言語”を築こうとしています。近年はSPSMとして、危険物施設を有する事業者とともに、現場のリスク評価、対策の優先順位付け、教育・訓練の整備までを一体で支援しています。

“安全”とは、リスクを適切にコントロールしている状態。そして“安心”とは、その安全性が人々に理解され、納得されている状態です。どれだけ備えが整っていても、それが見えなければ安心にはつながりません。安全であることをどのように達成しているのか、なぜ今の状態で大丈夫なのか——こうしたプロセスを丁寧に説明することが求められています。

こうした背景から、SPSMでは誰もが“リスクを考える力”を身につけられるよう、eラーニングによる教育プログラムを整備しています。現場のエンジニアから管理職・経営層まで、それぞれの立場で必要な学びを得られる柔軟な学習機会を提供しています。自らの判断で安全を守る文化を広げるには、学びと対話が欠かせません。

“安全”は制度や設備だけでは成り立ちません。それを支えるのは、人の知恵と、リスクを語り合う文化です。これからも産官学の協働を通じて、より深く、持続可能な“安心”の社会を築いていけるよう努力していきたいと考えています。